

第 49 回

2019. 09. 20

講 題 / テーマ：

水戸徳川家の文教事業—以東亞文明發展為中心
(水戸徳川家の文教事業—東アジア文明の發展を中
心に)

主講人：

徳川真木 (日本 The Tokugawa Museum 館長)



▲徳川真木館長

摘要：

徳川家康(1543—1616)將拜師林羅山學習儒學的第11子徳川頼房(1603—1661)封於水戸，指定為御三家之一。其子徳川光圀(1628—1700)擔任水戸藩主時期，開始實行提升庶民知識的文教政策。光圀作為施行仁政、受到農民愛戴的藩主，開始了歷史書編纂事業，也就是《大日本史》的編纂。光圀去世後，水戸徳川家持續進行這份事業，終於在1906年將耗時249年共

要旨：

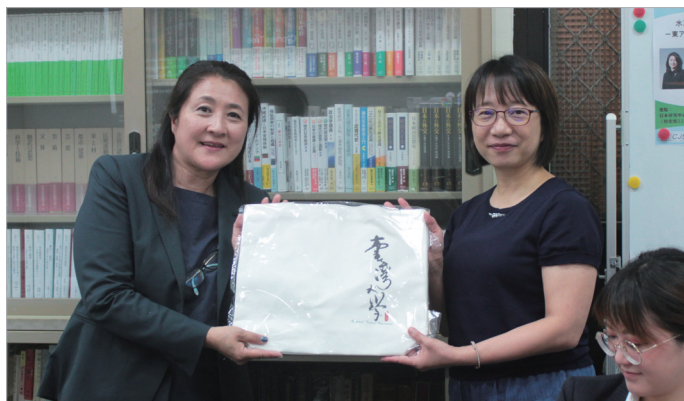
徳川家康(1543—1616)は、林羅山に儒学を学ばせた第11子頼房(1603—1661)を水戸に封じ、御三家の一つとした。その子の光圀(1628—1700)が水戸藩主を務めた時期に、庶民の知識向上のための文教政策を始めた。農民に愛される藩主として仁政を施した光圀は歴史書編纂事業を始めて、『大日本史』を編集させた。光圀の没後、水戸徳川家は、その事業を継続し、1906年、遂に249年の歳月を掛けて全402巻に及ぶ膨大な『大日本史』を完成させた。また、徳川ミュージアムの基本理念は「彰往考來(過ぎたるを彰らかにし、未来を考える)」というもので、『春秋左氏伝』から得た言葉であり、過去の出来事





402 卷之巨帙《大日本史》編纂完成。而德川博物館的基本理念「彰往考來（彰明往事，考察未來）」出自《春秋左傳》，意指如果不釐清歷史的話，則無法創造未來。再者，德川博物館是唯一可以閱覽水戶德川家完整歷史資料的機構，這裡的收藏品有高度歷史和藝術價值，更包含豐富的日本文化，受到國內外的讚賞。德川博物館與參考室更提供給調查研究使用，將成果公諸於世並且廣泛公開收藏品。◆

を明らかにしなければ、未來を創造することはできないということである。さらに、徳川ミュージアムは水戸徳川家の完全な歴史資料を閲覧できる唯一の施設であり、その収蔵品は高度な歴史と芸術的価値を持ち、日本の豊富な文化が包含されており、海外・国内から榮譽を讃えられている。徳川ミュージアムと参考室もまた調査研究に活用されて、その成果が広く知られ、世間の人々のために収蔵品が公開されているのである。◆



▲徳川真木館長與林立萍教授合影

第 50 回

2019. 10. 07

講 題 / テーマ：

日語與哲學：以「こと」（事）一詞為軸心

主講人：

林永強（獨協大學國際教養學部 副教授）



▲林永強副教授

摘要：

本文旨於從日語「こと」（事）一詞，再思日語與哲學、以至日本哲學的潛力與議題。

重點在於：一、「こと」與日本民族、二、「こと」的哲學意涵，三、「こと」與日本哲學。從結論而言，「こと」一詞縱使在語言上有其特質，但卻不能說是日本民族專有，一種文化本質而構成的語言。當中所含的特質其實包含了不同的文化元素，而非限於單一文化。對此，本文會集中討論和辻哲郎和木村敏的觀點。哲學的思考無疑必須透過語言，而不同的語言又必有其特質。尤自京都大學在一九九五年創立世界上唯一一個「日本哲學史」的主修以降，「日本哲學」的正當性（legitimacy）論爭不斷，其中一個議題就是日語與日本哲學的關係。日語是否日本哲學的一個必然條件（necessary condition）？如是，日語是否應該作為日本哲學的本質（essence）？日本哲學的正

要旨：

本論文は「こと」ということばから、日本語と哲学、そして日本哲学の可能性と問題性を再考したい。

本報告の課題は、①「こと」と日本民族、②「こと」における哲学的意義、③「こと」と日本哲学である。結論から言えば、「こと」は言語的な特徴を持つが、日本民族化によって形成されたことばでもない。小論では、和辻哲郎や木村敏の見解を中心に考察した。哲学は言うまでなく言語を通しての思考実験であり、それぞれの言語の特徴も持つ。しかし、「特徴」には一つの文化に限らず、多様な文化が含まれているのだ。1995年に京都大学は「日本哲学史」という世界唯一の講座を創立して以来、「日本哲学」の正当性（legitimacy）の問題をより一層激しく議論している。その中で日本語と哲学との関係は、一つの重要な課題となっている。日本語は日本哲学の必要な条件（necessary condition）、また本質



當性雖然可以說是基於日語的特質，但當中的特質是混雜了不同文化，並且隨時空不斷變化。另外，這種跨文化式的日本哲學，同時展現了以一種不同於「歐洲中心」(Eurocentric)的哲學論述。當然，它不可能亦不應該被視為一種「逆向東方主義」(reverse orientalism)，因為其本身並非旨於呈現一種純粹的「東方」或「日本」哲學。換言之，日本哲學是一套跨文化哲學，一方面脫離文化本質主義，另一方面則試圖突破「歐洲」和「東方」的哲學殖民化。◆

(essence)なのか。日本哲学の正当性は日本語の特徴に基づいて形成されるが、日本語そのものは多様な文化が含まれ、時間と空間によって変わっていく。このようなトランスカルチュラル(transcultural)の日本哲学は、ヨーロッパ中心(Eurocentric)と異なる論述を展開させる。それと同時に、一種の逆オリエンタリズム(reverse orientalism)でもない。日本哲学は決して一つの純粋な「東洋」、または「日本」の哲学ではない。言い換えれば、日本哲学は一種のトランスカルチュラル哲学(transcultural philosophy)であり、文化本質主義を超越する一方、ヨーロッパや東洋哲学の植民地化から逸脱する。◆



第 51 回
2019. 12. 12

講 題 / テーマ：

東亞《易》學潮流與文化異色

主講人：

鄭吉雄（香港教育大學文化史講座教授）



▲鄭吉雄教授

摘要：

《周易》作為一部影響遍及全球的中國經籍，同時也是日本、韓國歷史傳統素所看重的經典。從宏觀的角度來看，《周易》也廣泛地滲透到東亞各國歷史文化的各方面。歷史的變遷讓「東亞」作為一個地域概念在半個多世紀以來一直變化，隱然符合了《周易》主「變」(Changes)的精神。有見於此，主講人嘗試用這部「變化之書」作為座標，看看它在東亞地區的研究風貌，和呈現的多重文化色調。◆

要旨：

『周易』は世界的な影響力を持つ中国古典であり、同時に日本や韓国においても歴史的に評価されている古典でもある。マクロの観点からみても『周易』は東アジア諸国の歴史と文化のあらゆる側面に広く浸透している。半世紀以上にわたる歴史は、東アジアの一つの地域としての概念を変化させた。これは、『周易』の「変」(Changes)の精神に沿ったものとも言えるだろう。この観点から、講演者は「変化の書」としての『周易』について、東アジアにおける研究スタイルと多文化的な表れについて述べた。◆



學術講論會一覽 (2014. 03-2019. 10)

1	我的台灣文學研究年代記並近二十年台灣文學研究於日本(山口守/20140319)	27	早稻田大學社會科學綜合學術院的設立經過及教育理念(山田滿/20161220)
2	超越20世紀—日本的未來與近代經驗(三谷博/20140320)	28	現代日本社會在家庭教育上的挑戰(新保敦子/20170301)
3	311福島事故與日本核能(謝牧謙/20140416)	29	日本新教育運動的意義—歐美教育思想的受容與展開—(山崎洋子/20170309)
4	戰爭的記憶與記憶的戰爭(坪井秀人/20140430)	30	新書介紹『近代中國學在日本的起源—漢學的革新與同時代文化交涉—』(陶德民/20170315)
5	日本安倍政權的外交安全保障戰略關係(胡慶山/20140514)	31	「天理、國法、人情」—作為東亞共有的精神資產(森田明彥/20170426)
6	江戶日本和清代中國的文化交流(松浦章/20140521)	32	中美日三邊關係：日本外交政策辯論的視角(趙全勝/20170601)
7	東亞的被壓縮的近代和家庭主義—日本單親家庭的政策課題—(山西裕美/20140924)	33	江戶時代日韓間人物交流之二例(池內敏/20170607)
8	日本的學校教育(青木榮一/20141029)	34	試論日本安倍晉三政府的決策特徵—外交與安全政策的戰略與技術(松田康博/20170620)
9	近代日本的中國學·東洋學之成立與展開(伊東貴之/20141217)	35	歐洲日本學的建立與「日本文化像的變遷」(Willy.F.Vande Walle/20171013)
10	日本人和日記—其對於文化和文學的影響(松蘭齊/20141224)	36	前近代「宗藩體系」解體的隱秘邏輯—對『中日修好條規』的再認識(韓東育/20171110)
11	古代·中世日本之日記·文學中的「夢」(松蘭齊/20141224)	37	日本近世的思想與文化—從媒體的觀點出發—(辻本雅史/20171208)
12	詩歌的表現形式和旅說話之傳統(森真理子/20141226)	38	日本的消費者運動與消費者政策、倫理消費(大野敦/20171214)
13	美的教育的可能性—從日本的傳統藝能的視點—(楊奕/20150108)	39	現階段的日美中關係(高木誠一郎/20171225)
14	日本語研究的展望(郡千寿子/20150317)	40	日·中·韓的留學生與近代學問的形成(孫安石/20180301)
15	對語言與教育研究有益的語料庫使用法(曹大峰/20150428)	41	(1)流行文化的歷史進程—大眾媒體與流行時尚(2)從傳統文化到新興文化—從流行文化來思考(仲川秀樹/20180313)
16	東海的中日對立與和解(Paul Midford/20150506)	42	江戶時代的往來物資料與現代日語研究(郡千寿子/20180327)
17	中國(大陸)的日本研究概況及未來展望(宋志勇/20150917)	43	自由主義國際秩序的危機與日台關係(遠藤乾/20180605)
18	東京海上日動火災保險公司與德川博物館之災害應對(德川齊正/20151001)	44	迎接轉捩點的國際政治：美國的變貌及其對東亞的影響(箕原俊洋/20180611)
19	文天祥『正氣歌』和日本的武士道(佐藤鍊太郎/20151014)	45	歐洲的東亞學，特別是日本學的形成與發展(Willy.F.Vande Walle/20181116)
20	誰肩負了日本之近代—建立行政國家的官僚們的思想與行動(清水唯一朗/20151230)	46	日本的孝道文化—從江戶到現代(勝又基/20181213)
21	遣唐使和東亞的國際情勢(古瀨奈津子/20160330)	47	日本的外來語受容背景—以啤酒BEER為例—(郡千寿子/20190326)
22	核爆與戰爭的災害該如何傳達？(坂東弘美·中澤ミサヨ/20160602)	48	「言」與「事」與「心」—日本詮釋學的古典—(江藤裕之/20190521)
23	國家改造運動與對外侵略—1920年代的日本(邵建國/20161019)	49	水戶德川家的文教事業—以東亞文明發展為中心(德川真木/20190920)
24	筆談與東亞文化交流—以清朝初代駐日公使館員的在日筆談資料為中心—(劉雨珍/20161102)	50	日語與哲學：以「こと」(事)一詞為軸心(林永強/201901007)
25	新浪漫主義的再詮釋與白樺派—以武者小路實篤為中心—(米山禎一/20161219)		
26	日本的「中國通」與歷史認識問題(劉傑/20161220)		